

## アジア養蜂研究協会



### 役員の交代と 第3回大会の展示会報告

第3回アジア養蜂研究協会大会中の1996年10月8日に総会が開催された。酒井哲夫会長の引退表明があり、またAAAへの期待に応える体制作りのため各セクションの責任者を複数お願いするなどの変更があった。1998年第4回大会までの新役員は以下の通り：

#### 会長：

松香光夫（玉川大学ミツバチ科学研究施設）

#### 副会長：

Prof. L. R. Verma (Dr. YSP 園芸林業大：インド)

Prof. S. Wongsiri (チュラロンコン大：タイ)

事務局長：吉田忠晴（玉川大）

会計：中村 純（玉川大）

#### セクション責任者：

- ・ミツバチ生物学

Prof. Guang-huang Yang (農業科学院：中国)

Prof. Bang-yu Kuang (雲南農業大：中国)

- ・ミツバチ病害虫

Prof. Yongyoot Waikakul (コンケン大：タイ)

Prof. Kun-Suk Woo (ソウル大：韓国)

Prof. Christine Peng (カリフォルニア大：USA)

- ・ミツバチと環境

Dr. Makhdzir Mardan (マレーシア農業大)

Dr. Osman Kaftanoglu (チュクロバ大：トルコ)

- ・養蜂植物とポリネーション

Prof. R. C. Sihag (ハルヤナ農業大：インド)

Dr. C. R. Cervancia (フィリピン大)

- ・ミツバチ生産物

井上敦夫 ((株)養蜂研究所)

Prof. Yaacov Lensky (ヘブライ大：イスラエル)

- ・養蜂技術

Dr. R. W. K. Punchihewa (農業省：スリランカ)

Mr. K.K. Shrestha (ICIMOD：ネパール)

- ・養蜂経済

Mr. Pham Xuan Dung (ミツバチ研究開発センター：ベトナム)

- ・養蜂振興

Mr. Agus Sulistiano (林業省：インドネシア)

Mrs. Nguyen Thu Hang (ミツバチ研究開発センター：ベトナム)

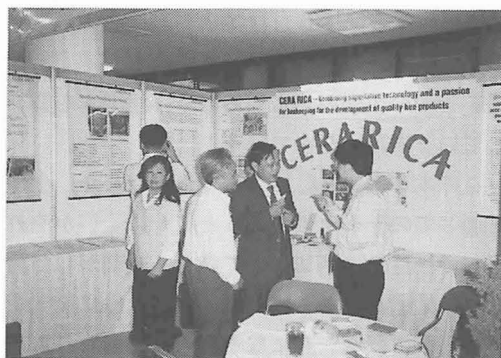
Dr. Naomi Saville (ICIMOD：ネパール)

展示会には各国の活動紹介や関係団体、企業が12ブース出展した。韓国はソウル大学ミツバチ科学研究所の紹介の他に、韓国養蜂協会がミツバチ生産物の展示とAAAロゴ入りポロシャツと韓国うちわを販売し、注目を集めた。またこれまで個人としてのみAAAに参加していた中国が正式に入会することになり、中国養蜂学会も窓口を設け、数社の生産物展示ブースと共に各方面からの問い合わせを受けていた。

日本からは(株)セラリカ野田と玉川大学が出展、以下の各社からは協賛金をいただいた。改めて厚く御礼申し上げる。

日本プロポリス協議会、(有)天然園、(社)日本養蜂はちみつ協会、(株)ナチュラルグループ本社、(株)トーマン。

なお、第3回大会全体の報告および参加記は次号ミツバチ科学18巻1号に掲載される。



セラリカ野田の展示ブースで

## 研究施設紹介 (5)

### 雲南農業大学東方蜜蜂研究所

中国南西部の雲南省はベトナム、ラオス、ミャンマーと国境を接し、省内には25の少数民族が生活する。気候風土は変化に富み、多様で豊富な養蜂植物が一年を通じて開花する。アジア在来のミツバチはオオミツバチ、ヒマラヤオオミツバチ、コミツバチ、クロコミツバチ、トウヨウミツバチの5種が確認されている。これらは約百万群が省内に生息し、雲南はまさに天然のミツバチ遺伝子保存庫の役割を果たしている。またセイヨウミツバチも導入されている。

雲南農業大学東方蜜蜂研究所 (Apis cerana Res. Inst. of Yunnan Agric. Univ., Hei Long Tan, Kunming, Yunnan, China) は1985年に創立され、匡邦郁教授以下13名の所員を擁する。下記の主要研究テーマについてすでに多くの成果を得ている：ミツバチ種資源；養蜂植物資源；6種のミツバチの染色体およびアイソザイム；アジア在来ミツバチ種の管理技術；トウヨウミツバチによる作物・果樹の花粉



媒介；ミツバチ生産物の処理加工と利用；省内の少数民族への養蜂振興；優良女王蜂系統の養成；ミツバチ生産物の畜産への応用。雲南農業大学の養蜂学専攻の学生も2年間研究所で学び、約200名の卒業生が養蜂分野の研究者として中国全土で活躍している。1997年に大学院修士課程も開設される。既に20か国、約百名のミツバチ専門家が当研究所を訪れ、海外との交流、情報交換も盛んである。

松香ほか(1994)が第33回国際養蜂会議の折に訪問した記事は、ミツバチ科学15(1):34-39に掲載されている。

## 参考図書紹介

### ミツバチの観察事典

「ミツバチ観察事典」小田英智・藤丸篤夫、偕成社。pp.39. 1996. 2,400円。ISBN4-03-527-240-x39.

学校の図書コーナーの一角に子供向けのミツバチの本が何冊かおいてある。その中でいずれも汚れやすりきれが多いのがミツバチの生活やおもしろさを写真で紹介した本である。汚れているのはそれだけ子供達が何度も手にしているため、見て理屈なしにわかる写真による紹介が文章を中心にしたものに比べ、子供の興味を強く引きつけていることがわかる。

この「ミツバチ観察事典」もまた子供向けの本で、カブトムシ、タンポポ、テントウムシなどといった自然の身近な動植物の観察事典の中の一冊であり、多くの美しい写真を使ってミツバチの不思議な行動やおもしろい生活を様々な方向から描いている。

構成はミツバチ王国への案内、花の蜜を集めるミツバチ、花粉を集めるミツバチ、ミツバチ王国の入口、ハチミツの加工と貯蔵、花粉の貯蔵、労働部屋を作るミツバチ、ミツバチの女王…といったようなミツバチの生活の様子のいろいろな場面を18のテーマに取り上げ、それらについて詳しく鮮明な写真とともに解説してある。まず初めに外の花を訪れているミツバチの働きに目をとめさせ、次第に巣箱の内側の活動や生活へと誘い、外からは見られない不思議な巣箱の中の生活のおもしろさや不思議さを紹介していく内容になっている。

この本が事典として作ってあるためか、全体を通じてのテーマはちょっと見えにくいそれぞれの項目や事柄について詳しく説明がしており、子供達がこれまでの本と同じように興味を持って手に取る一冊になるだろうと思われる。

(佐藤 邦明)